

二〇一〇年度 近畿大学泉州高等学校
入学試験 問題用紙

国語 (五〇分)

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かないでください。
左記の注意事項をよく読んでください。

注意事項

- 一. 開始の合図とともに、解答用紙があるか確認してください。
- 二. 解答は、すべて黒鉛筆またはシャープペンシルで解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 三. 問題用紙、解答用紙ともに、受験番号を記入してください。持ち帰ることはできません。
- 四. 問題用紙や解答用紙で印刷の不鮮明な箇所や汚れがあれば、監督者に申し出てください。
- 五. 携帯電話の電源は切ってください。これ以降の使用はできません。
- 六. 試験中に気分が悪くなったり、トイレに行きたくなった場合は、監督者に申し出てください。
- 七. 終了の合図と同時に解答をやめてください。
- 八. その他、すべて監督者の指示に従ってください。

受験番号

□ 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

誰にもわからない自分——どんなに親しい人間にもわかってもらえない自分。いや、わかってもらう必要のない自分。それを凝視するとき、人によつては、人間関係などまったくくだらない、という結論をくだすかもしれない。ましてやいくら人につきあってみても、所詮、人間は最後までひとりなのだ。生まれるときもひとりなら、死ぬときもひとりである。その孤独なひとりの生命が、あちこちで他の生命とふれあうのが人間関係であるとしても、それは、その生命にとって、べつだん関係はないようにも思えてくる。そんなふうを考えてゆくと、人間関係ははかない。

だが、そういう見方をとることで、人間関係を□ というのではない。いったんそのようなはかなさを見きわめたうえで、あらためて人間関係を考えようというのが、じつはここでの結論なのである。

われわれが人間関係を考えるうえで大事なものは、まずそれぞれの人間が誰にもわからない内的な自我もっていることをみとめることである。それから、人間同士の「理解」はつねに完全でないことをみとめることである。いやむしろ、われわれの人間関係は誤解にみちている、という事実をみとめることである。一言でいえば、われわれはお互いの存在の内部について、まったく無智であることをみとめなければならないのだ。すべての人間が誰にもうかがい知ることのできない自分をもっている。誰もそこに立ち入ることはできないし、ましてやそれを理解することなど思いもよらぬ。だが、大事なのはその事実を理解することなのだ。つまり、人間同士理解しあうことはむづかしい、ということの理解が、あらゆる人間関係の基本でなければならぬ。完全な理解ができないことを承知のうえで、近似的に他人の心に近づく努力、それが人間関係の基本原理なのである。

それだけではない。われわれはさらに誤解というものもつ積極的側面にも注意をむける必要がある。誤解というものは、二人の人間のあいだでの意味のズレである。あるいは変型である。しかしあたらしい考え、あたらしい視野がひらかれるのも、まさしくこのような意味のズレのリョウイキにおいてなのではないか。正確無比な意味の転移からは創造は生まれない。人間の内部の、複雑な心のメカニズムのなかで、意味が小突きまわされ、その姿を変えること——それが創造というものの条件のひとつ

であり、また、人間の開発ということにもつながるのである。

そのような人間開発を成功させるためには、いろいろな条件がある。そしてそのいろいろな条件の多くは、実現させることができず、むづかしい。しかし、なによりも大事な条件は、心の多元性をみとめる哲学の立場をとることではないだろうか。世の中には多様な人間が存在し、多様な心が存在する。心と心との妥協・折衷は常に進行するが、そのさまざまな心が「統一」されることはたぶんありえない。人間世界には、なにがしかの秩序があるようにみえて、じつは、さまざまな心が勝手な方向をむいているのである。その無秩序とさえみえる心の多様性をみとめることを考えたい。多様性をみとめる姿勢は、ある考えだけが絶対に正しくて他はことごとく誤りであるというような、かたくなな姿勢の対極に立つ。その姿勢をとった心は「ひらかれた心」である。そのひらかれた心が形成されてはじめて、他の心とのまじわりが生まれる。

さまざまな心の多元性をみとめるというのは、とりもなおさず、自分の心のなかに多様な自分を並存させているということである。並存させて常にそれをぶつけあうことから創造が生まれ、よりゆたかな自我が形成されるのである。もちろん、多様な自我の並存のバランスをとることはかならずしもヨウイなことではない。バランスをとるためには、「こちら側の自分」の統合力が必要だ。だが、その並存と統合のくりかえしに堪える能力こそ、みよりの多い人間関係をつくるうえでもっとも大切な条件なのである。

人間関係とは、理解と誤解のからまりあいである。理解はつねに誤解と抱きあわせである。人間関係ということばは、なににかしら、つるつるの、なめらかなイメージをとまなう。しかしそのイメージはたぶん正確ではない。人間関係は、そんなにつるつるのものではなく、もうすこしごつごつしている。摩擦もあるし、かみ合わないところもある。いわばたいへんな悪路なのである。その悪路にいとむ勇氣のある人間だけが、人間関係のなかで自らを開発する資格をもっているのである。

(加藤秀俊「人間関係」による)

(注) *無智…無知。 *メカニズム…機構、からくり、しくみ。

*折衷…両方の良いところをとって調和させること。

問一 〓線⑦・㊦の漢字の読みをひらがなで書き、㊩・㊪のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 にあてはまる最も適当な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 構築しよう イ 破壊しよう ウ 否定しよう エ 肯定しよう

問三 〓線①「その事実」とありますが、どのような事実ですか。「……という事実。」に続くように、本文中から十七字で抜き出して答えなさい。

問四 〓線②「誤解というものがもつ積極的側面」とありますが、それは具体的にどのようなものですか。本文中の言葉を使って四十五字以内で答えなさい。

問五 〓線③「正確無比な意味の転移」とありますが、どういうことですか。これをわかりやすく言い換えている言葉を、本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問六 〓線④「そのさまざまな心が『統一』されることはたぶんありえない」とありますが、筆者がこういうのはなぜですか。その理由を、人間世界がどのようなものであるかを踏まえて、本文中の言葉を使って、二十五字以内で答えなさい。

問七 〓線⑤「そのひらかれた心が形成されてはじめて、他の心とのまじわりが生まれる」とありますが、「ひらかれた心」を形成するためにはどうすることが必要であると筆者は述べていますか。次の文の a b にあてはまる最も適当な言葉を、aは二字、bは三字で、本文中からそれぞれ抜き出して答えなさい。

自分のなかにも a b する多様な自我をおつけあったり、またそのバランスを取るための b を養い、自我を形成していくこと。

問八——線⑥「つるつるの、なめらかなイメージ」とありますが、これはどのようなイメージの人間関係を表していますか。

最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 信頼と愛情に満ちた美しい人間関係

イ 表面的なつきあいだけの人間関係

ウ 手応えが感じられない人間関係

エ 障害などのない円滑な人間関係

問九 この文章で筆者が述べたかったこととして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どんなに親しい人間関係でも、互いを理解し合うことは困難であり、その意味では人間関係ははかないものであるが、現実には人間が生きていくうえで、それほど重要な問題ではない。

イ 相手の心の多様性をみとめるためには、一つの考えだけが絶対に正しくて他はすべて誤りであるというような、かたくなな姿勢ではなく、相手の考えをすべてみとめて受け入れるというひらかれた心を持つ必要がある。

ウ 人間は互いを完全に理解しあうことは不可能なことであり、そのなかで人間関係を築こうとするなら、理解が完全でないことをみとめうえで他人の心に近づき、誤解をなくしていく必要がある。

エ 誤解に満ちた人間関係のなかでみりのある人間関係を築くためには、相手の心の多様性をみとめる努力をするとともに、自分の内部にある多様な自我ともたたかって人間形成を図らねばならない。

二 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

春秋をとわず、風の日は何となく気が散ってしまうので好きになれないが、雨の日というのはわるくない。豪雨となれば話は別である。強い風の日には外歩きすると、心までが吹き立てられるようだ。家の中で草木の揺れや風の起こす物音を見聞きしていても、気持ちの動くことに変わりはない。まして、雨戸をたててしまった深夜から明け方にかけて、いやおうなしに風を聞くだけの状態になると、降りこめられて土の中に埋もれてもまだ雨のほうがいいなどと思う。雨のこわさも知らぬではないが、知らないふりをして風にすねているらしい。

家の近くにちよつとした溪谷がある。木立にはさまれた流れをこの溪に渡された橋の上について見下ろすながめは、ここが東京都内だということをしばしば忘れさせてくれる。以前は木の橋だったが、今はコンクリートの橋にかわっている。

春に、この溪のわずかな桜を求めて来る人がある。秋の紅葉をたずねる人もある。冬枯れの溪には、老人の薄い白髪が風に逆立ったようなおもむきがあつて、それはこの時期の溪だけが見せる **A** である。寒さのあいだひとつ場所に立ち続けた木々は、やがてアタタかな陽気の中で、内にたくわえ続けたいのちをもどかしそうにほとばしらせ始める。

薄紅色の、若草色の木の芽やつほみが、それこそ一日ごとの変化を示しはじめると、溪全体が若葉色にソまる時も遠くないと思うようになる。じつさいこのごろの橋の上の行き来には、人も我も、草も木も生きているという実感があつて、自分に限つて言えば、生きている、の中には、生きていた、も、まださしあたって生きのびるらしい、もふくまれる。

しかし私は、この溪の最高のながめは、若葉が溪を暗くするほどにしげつたころの雨の日だと思つている。一木ごとの、いや一枚ごとの、似ているようでよく見れば決してひとつではない若葉の群れが雨に洗われ、互いのしずくをかけ合いながらそれぞれの色をさりげなく主張して譲らない。

流れのほとりの道がぬかつている時、まず溪を訪ねる人はない。それで私は傘をさしたまま橋の欄干によりかかり、艶も翳もある冴えた緑が、静かな雨の音の中でいよいよ冴えてゆくのをじつとながめる。しばらくして、反対側の欄干に移動する。

木立に目をあずけ、そこに小止みなく降り注ぐ雨の音に B を傾けていると、しんからなごやかな気分になって、我にもなくしおらしくなる。このまま溪の中に溶けて、若葉の一枝、幹の一節になれたらどんなにいいだろう、などと思う。

この目であと何回そういう溪をながめられるのかは自分にも分からない。しかし少なくとも今年はまだ、橋からのながめが愉しめそうである。

(注) * 溪谷 || 山に挟まれた川。谷。

* 翳 || 光のあたらない部分。陰。

(竹西寛子「愛するという言葉」による)

問一 || 線⑦・①のカタカナを漢字に直し、②・⑤の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問二 || 線①「豪雨となれば話は別である」とありますが、これはどういうことを言ったものですか。この場合の「話」とは、どういうことかを明らかにして、本文中の言葉を使って答えなさい。

問三 || 線②「気持ちの動くことに変わりはない」とありますが、「気持ち動く」とは、どういうことですか。本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問四 A B にあてはまる体の部分を表す言葉を、それぞれ漢字一字で答えなさい。

問五 || 線③「生きていくという実感」とありますが、春先に木々が胎動し、木が生きている実感を感じさせる表現を本文中から二十九字で探し、その始めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。(句読点は含まない)

問六 — 線④「じつとながめる」とありますが、筆者が草木の細部までじつとながめて書いていることが読み取れる一文を本文中から探し、その初めの五字を抜き出して答えなさい。

問七 — 線⑤「我にもなくしおらしくなる」とありますが、これは筆者がどのような気持ちになることを言っていますか。簡潔に答えなさい。

問八 この文章には、筆者のどのような心情が中心につづられていますか。本文中の言葉を使って答えなさい。

問九 この文章の表現について述べたものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 漢語を多用した表現で、溪谷の四季の美しさを格調高く描いている。
- イ 比喩や擬人法を多用して、溪谷の四季の美しさを印象深く描いている。
- ウ 自分の感情をおさえ、溪谷の四季の美しさを客観的にたんとんと描いている。
- エ 短文を重ねた歯切れのよい文体で、溪谷の四季の美しさを印象深く描いている。

三 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

*まごころ①じしやう②
双六の上手といひし人に、その手だてを問ひはべりしかば、勝たんと打つべからず。負けじと打つべきなり。いづれの手か、
(名人) (尋ねましたところ) (勝とうと思つて) (どの手が早く負

とく負けぬべきと案じて、その手を使はずして、一目なりともおそく負けべき手につくべしといふ。
けるであろうかと思案して)

③ 道を知れる教へ、身を治め、国を保たん道も、又またしかなり。
(その道を知っている者の教えであつて) (その通りである)

(『徒然草』による)

(注) *双六：今のすごろくと違い、盤の上に黒白の駒石各十二個を並べて対戦し、二個のさいころを二人が交互に振つて、出た目の数だけ石を進め、すべての石が相手の陣地に入った方を勝ちとする遊び。

*一目：双六の盤の筋目の一つ。

問一 —— 線①「上手といひし」を現代かなづかいに改め、すべてひらがなで答えなさい。

問二 —— 線②「その手だて」とありますが、勝負に勝つためにはどうするのがよいと、名人は言っているのですか。現代語で二十五字以内にまとめて答えなさい。

問三——線③「道を知れる教へ」とありますが、筆者は、名人の教えのどのようなところに感心しているのですか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 深い意味を含んでいるところ イ 普遍的な真理に通じているところ

ウ 特別な教えではないところ エ 人の心理をとらえているところ

問四 筆者の問いかけに対する名人の答えは、どこからどこまでですか。その部分を本文中から探し、その始めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問五 『徒然草』と同じ分野の作品を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 竹取物語 イ 枕草子まくらのかうし ウ 平家物語 エ 今昔物語集こんじやく

四 次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～③の言葉の対義語を、あとのア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 抽象 ② 理論 ③ 分裂

ア 実践 イ 相対 ウ 具体 エ 集散 オ 統一 カ 客観

問二 次の①～③の——線部の状態を表すのにふさわしいことわざを、あとのア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 「こらっ—」という声を聞くと、子供たちはちりちりばらばらに逃げ出した。

- ② 所属している新聞部は、あれこれ指図する人が多くてまとまりがつかない。

- ③ 出がけに突然雨が降ってきたが、運良く兄が車で来たので乗せてもらった。

ア 渡りに船 イ 海老で鯛を釣る ウ 蜘蛛の子を散らす

エ 転ばぬ先の杖 オ 大ぶろしきを広げる カ 船頭多くして船山に登る

五 次の文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

その気になりさ^①えすれば、何でもできると考^②えて頑張った。

問一 文中から連体詞を一つ抜き出して答えなさい。

問二 — 線①「さえ」と意味・用法が同じものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頭痛がするうえに、熱^①さえ出てきた。

イ 小学生の弟^①さえ知っていることを知らなかった。

ウ 雨^①さえ降らなければ、試合に勝てたはずだ。

エ 彼は怒ってしまい、目^①さえ合わそうとしない。

問三 — 線②「考え」と活用の種類が同じ動詞を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 呼ぶ イ 似る ウ 重ねる エ 決する

受験番号	
得点	

二

問一	⑦		④		⑤		⑥	きあわせ
問二								
問三								
問四								
問五								
問六								
問七								
問八								
問九								

(問小計)

三

問一	⑦	かな	④	まる	⑤		⑥	けて
問二								
問三								
問四								
問五								
問六								
問七								
問八								
問九								

(問小計)

三

問一								
問二								
問三								
問四								
問五								

(問小計)

四

問一	①		②		③
問二	①		②		③

(問小計)

五

問一			
問二			
問三			

(問小計)

